

# 日曜におも 思う

特別編集委員 山中季広

## 大分弁 西諸弁 マルセイユ弁

先週日曜の屋下がり、大分県の豊後高田市で開かれた「方言まるだし弁論大会」を見学した。

さかしい(元氣だ)。よだきい(面倒だ)。ふがわりい(機嫌が悪い)。

高校生から90代まで弁士9人が地元言葉を使っ、会場の拍手を競った。

市商工観光課の安藤与一郎係長(44)によると、1983年に始まった秋の恒例行事。「テレビの影響で大分弁がすたれてきた。堂々と話せる場を作ろうと商店主らが始めました」

大分で教わったのは時刻の言い方。8時50分を「9時前10分」と言う。若い世代は使わないそうだが、外国語のようだ。県外ではまず通じない。

私の出身地三重県にも地元でしか通じない言い回しがある。たとえば混雑や渋滞を指す「つむ」。この道路はいつもつんどるなあ。近県なら通じることもあるが、東京では理解されない。

重い物を持ち上げる「つる」もしかし。アルバイト先の塾で「だれか机つ

るの手伝って」と私が小学生に頼んだ。「クレインか何かでつり上げるんですか」と聞き返されて赤面した。

さて今秋、私を含む日本中の赤面経験者が深い感銘を受けた方言がある。

宮崎県の西諸弁地域の言葉だ。「2市1町でしか通じない」と言われる西諸弁の魅力を、地元の小林市役所がみごとに映像化した。

フランス人男性が小林市内をめぐり歩く。フランス語のように聞こえる独り語りが実はすべて西諸弁である。

ンダモシタン、ジョジョナトコジャツチ、スンミヤンIIあらまあ不思議なとこだから住んでみたらどうね

オイモコケ、ドヒコイットカ、ケワスレッシモタドン、オテチタガヨIIいつしか私も住みついて何年もたった

フランス語の素養のない私はままとだまされた。最後の最後まで西諸弁とは気づかなかった。

「私ら西諸弁を話す者がふたり都会の電車内で話していると、『外国語かなあ』と隣でささやかれる。それを逆手にとって、あえてフランス人に西諸弁を発声してもらいました」と市企画政策課の榎木大輔さん(37)。

評判はネットからテレビや新聞に広まり、公開2カ月で150万回も再生された。肥後正弘市長(70)は「市の宣伝効果は抜群。西諸弁がこんな脚光を浴びたことはありません」と喜ぶ。

方言史に輝くヒット作だが、さて当のフランス人の耳にはどう響くのか。

南仏マルセイユ出身のクリス・ベルアド首都大学東京助教(33)に動画を見てもらった。「これ全然フランス語じゃない」。ものの5秒もしないうちに見破られた。「でも面白い。フランスと違って方言がいまも立派に使われている日本ならではの試みですね」

ベルアドさんによると、フランスでは16世紀、北側住民のオイル語が標準フランス語の座をつかんだ。それ以外の南や東、西の言語は圧迫された。地域言語の次に圧迫されたのは、なまりのあるフランス語。ベルアドさん

ら地方出身者は当然なまるのだが、パリでは表に出しづらい。「授業や会議、面接など大事な場面で不利に働く。フランス社会はなまりに冷たい。発音矯正の教室が繁盛しています」

日本在住10年、うち9年を関西で過ごしたベルアドさんの目には、日本は標準語が威張りすぎておらず、方言やなまりにも寛容に見えるそうだ。

実のところ日本の言語環境もそうほめられたものではない。沖縄県では地元言葉を口にした生徒に「方言札」をぶらさげるなど過去に行きすぎた指導があった。アイヌ語や八丈島方言などは現に消滅の危機にある。

いまは安泰の方言でも、若い話し手を失えば数世代で絶えかねない。豊後高田市や小林市のように堂々と話せる機会や機運をつくり出す努力が要る。

地方がみるみる細りゆく時代、都会で方言を笑われて大人がモジモジ赤面している余裕はもうないのだから。

遅まきながらそう気づいた。